

## 意味化ゼロの言葉と歌

―『古事記』の地名起源「訶和羅」と「あづさゆみまゆみ」の歌から―

### 三品 泰子

#### 一字の「音」

書物の成立を行為と身体の側から考えるとき、『古事記』序文が自らを、種々の言語行為が一人の身体の中や人と人との間で交錯し、そのプロセスが幾重にも折り畳まれていた書物として演出していることは、着目に価する。

猪股ときわは、世界が「敷文構句」によって構築されている（『古事記』序文の）現代からは認識不可能な相にある「上古」先代」を、天武天皇が探り見ることができたと書かれていることと、初代天武天皇と天武という『古事記』作成にとっての二つの始まりを成す時点に、天皇が「歌」を「聞」くという行為を置いていることとの関わりに注目する。「上古」の言葉の音声<sup>を</sup>字の「音」から探ることができているのは「歌」の心を知ることが出来るからであり、この天武天皇の言語行為が、すべてを字の「音」で書く「歌曰」や、稗田阿礼の「誦」の根拠として位置づけられていると説く。

稗田阿礼が、字を目で見つつ天武天皇の口から発せられる「上古」の言葉の音声<sup>を</sup>耳で聞き、心に勒すことで「上古」の言葉

の「心」になり、太安万呂の前で字から換起される未知の言葉を口<sup>に</sup>発す。安万呂は、未知の言葉と化した既知の字を書く。

では、このような序文が提示する行為と身体を受け、本文はそれをどのように言語として体現しているだろうか。大山守を戦闘で殺したときウヂノワキイラツコによってうたい出された歌と、前触れの音を含む地の文とから考えてみたい。

#### 二 「訶和羅鳴」と「弟王歌曰」

「訶<sup>カ</sup>和<sup>ワ</sup>羅<sup>ラ</sup>之前」という地名の起源となった「訶和羅」（一字一音表記）とは、皇位をめぐる戦闘と死の局面で、勝者・ウヂノワキイラツコの武器「鉤」が、敗死者・大山守の体を覆う「甲<sup>よろい</sup>」を引き掛けたときに鳴ったという音呼び起こす字である。

於是、伏<sup>レ</sup>隱<sup>レ</sup>河邊<sup>一</sup>之兵、彼廂此廂、一時共興、矢刺而流。

故、到<sup>レ</sup>訶和羅之前<sup>一</sup>而沈入<sup>レ</sup>訶和羅三字<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>音<sup>一</sup>。故、以<sup>レ</sup>

鉤探<sup>レ</sup>其沈處<sup>一</sup>者、繫<sup>レ</sup>其衣中甲<sup>一</sup>而、訶和羅鳴。故、號<sup>レ</sup>其

地<sup>一</sup>謂<sup>レ</sup>訶和羅前<sup>一</sup>也。爾、掛<sup>レ</sup>出其骨<sup>一</sup>之時、弟王歌曰、

知夜夜比登 宇遲能和多理迹 和多理是迹 多弓流 阿

豆佐由美麻由美 伊岐良牟登 許許呂波母閉杆 伊斗良  
牟登 許許呂波母閉杆 母登幣波 岐美袁淤母比傳 須  
惠幣波 伊毛袁淤母比傳 伊良那祁久 曾許爾淤母比傳  
加那志祁久 許許爾淤母比傳 伊岐良受曾久流 阿豆  
佐由美麻由美

（是に、河の邊に伏し隠りし兵、彼廂此廂一時共に興りて、  
矢刺して流しき。故、訶和羅之前に到りて沈み入りき（訶  
和羅の三字は音を以てよ）。故、鉤を以て其の沈みし處を  
探れば、其の衣の中の甲に繫りて、訶和羅と鳴りき。故、  
其地を號けて訶和羅前と謂ふ。爾くして、其の骨を掛け  
出しし時に、弟王の歌ひて曰はく、

ちはやひと 宇治の渡に 渡り瀬に 立てる あづさゆ  
みまゆみ い伐らむと 心は思へど い取らむと 心は  
思へど 本方は 君を思ひ出 末方は 妹を思ひ出 苛  
ななく そこに思ひ出 かなしけく ここに思ひ出 い  
伐らずぞ來る あづさゆみまゆみ

「故、號<sub>二</sub>其地<sub>一</sub>謂<sub>二</sub>訶和羅前<sub>一</sub>也。」という地名が発生する無時  
間のセンチンスをはさんで、その前の「繫<sub>二</sub>其衣中甲<sub>一</sub>而、訶  
和羅鳴」と後の「掛<sub>二</sub>出其骨<sub>一</sub>之時、弟王歌曰」とは同じ時を  
指し、「訶和羅」と鳴ることと弟王（ウヂノワキイラツコ）が  
歌をうたい出すことは異なりながらも同じ事を言うという、  
反復の關係にあるのではないか。「訶和羅」とは、単に金属製  
の武器がぶつかったときの擬音語ということではなく、武器を  
介してウヂノワキイラツコと大山守とのあいだで生じた音声で  
あり、意味分節されていないゼロの言葉である。「訶和羅」と、「弟

王歌曰」の一字一音によって喚起される歌の言葉とが反復運動  
のなかにあるとすると、歌はどのようによめるだろうか。

通説では、宇治川の渡りに立つている檀という樹木を大山  
守に見立てて、樹木＝大山守をウヂノワキイラツコが「伐る」「取  
る」、すなわち殺すことの比喩として解釈されている。しかし、  
そうだろうか。

戦闘に先立つ場面で、大山守が宇治川の渡りの執轍者と化し  
たウヂノワキイラツコに向かって、宇治の山の大猪を「取」れ  
るかどうかが問うて否定される問答がある。

於是、其兄王、隱<sub>二</sub>伏兵士<sub>一</sub>、衣中服<sub>二</sub>鎧<sub>一</sub>、到<sub>二</sub>於河邊<sub>一</sub>、  
將<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>船時、望<sub>二</sub>其嚴筋之處<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>爲弟王坐<sub>二</sub>其吳床<sub>一</sub>、  
都不<sub>レ</sub>知<sub>二</sub>執<sub>レ</sub>轍而立<sub>レ</sub>船、即問<sub>二</sub>其執轍者<sub>一</sub>曰、傳<sub>二</sub>聞山有<sub>二</sub>  
忿怒之大猪<sub>一</sub>。吾欲<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>其猪<sub>一</sub>。若獲<sub>二</sub>其猪<sub>一</sub>乎。爾、執<sub>レ</sub>轍  
者答曰、不<sub>レ</sub>能也。亦問曰、何由。答曰、時時也、往往也、  
雖<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>取而不<sub>レ</sub>得。是以白<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>能也。

（是に其の兄王、兵士を隠し伏せ、衣の中に鎧を服て、河  
の邊に到りて、船に乗らむとする時に、其の嚴筋れる處を  
望みて、弟王其の吳床に坐すと以為ひて、都て轍を執りて  
船に立てるを知らずして、即ち其の執轍者を問ひて曰ひし  
く、「この山に忿怒れる大猪有り」と傳へ聞きつ。吾、其  
の猪を取らむと欲ふ。若し其の猪を獲むや」といひき。爾  
くして、執轍者が答へて曰ひしく、「能はじ。」といひき。亦、  
問ひて曰ひしく、「何の由ぞ」といひき。答へて曰ひしく、「時  
時、往往に、取らむと爲れども、得ず。是を以て、能は  
じとまを白しつるぞ」といひき。）

さらにこの問答に先立ち、「於是大山守命者、違<sub>レ</sub>天皇之命、猶欲<sub>レ</sub>獲<sub>二</sub>天下<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>殺<sub>二</sub>其弟皇子<sub>一</sub>之情、竊設<sub>レ</sub>兵將<sub>以</sub>攻<sub>二</sub>（是に大山守命は天皇の命に違ひて、猶天の下を獲むと欲ひて、其の弟皇子を殺さむ情有りて、竊かに兵を設けて攻めむとしき）とある。大山守はウヂノワキイラツコを「殺<sub>二</sub>」し皇位を「獲<sub>二</sub>」られるかどうかを、宇治の土地神とおほしき大猪を「取<sub>二</sub>」獲<sub>二</sub>」られるかどうかを通して知ろうとし、宇治川の執楯者からその答えを得ようとしている。宇治川の執楯者から「能はじ」と告げられ、そのお告げ通りに大山守は戦いに敗れる。戦闘の行方を占うために狩りをして土地神に神意を問ううけひが、ここでは大山守と執楯者<sub>二</sub>ウヂノワキイラツコとの間の問答というかたちをとって行われている。ウヂノワキイラツコが宇治の土地神の心を口にできるのは、自身が土地のライフ・インデクス「ちはやぶる（ちはやひと）」宇治川の威力と一つになる執楯者そのものになっていくからだろう。

このように、ウヂノワキイラツコを「殺す」皇位を「獲る」こと、宇治の山の大神を狩りで「取る」「獲る」こと、宇治川の渡りの「あづさゆみまゆみ」を「伐る」「取る」こと、これらはすべて大山守の心だとするほうが一貫性があるてよいだろう。戦闘で人を殺すこと、狩猟で獲物をとること、樹木伐採することとが順に置き換えられているのだ。

歌をうたっているのは勝者のウヂノワキイラツコで、大山守はこのとき死んでいる。戦闘の後に、敗死した者の心が勝者を介して歌われる例は、他にも見られる。神武の軍が宇陀の地の兄宇迦斯を斬り散らし、弟宇迦斯の献る大饗のものを食べた

き、大饗に起きた「歌曰く」である。

宇陀に兄宇迦斯（宇より下の三字は音を以るよ。下は此れに效へ）、弟宇迦斯の二人有り。．．．殿を作り、其の内に押機を張りて、待ち取らむとす。．．．乃ち己が作りし押に打たえて死にき。爾くして、即ち控き出して斬り散しき。故、其地を宇陀の血原と謂ふ。然くして、其の弟宇迦斯が献れる大饗は、悉く其の御軍に賜ひき。此の時に、歌ひて曰はく、

宇陀の高城に 鳴毘張る 我が待つや 鳴は障らず  
 いすくはし くちら障る 前妻が 肴乞はさば 立狐棧  
 の 實の無けくを こきしひゑね 後妻が 肴乞はさば  
 蔽神 實の多けくを こきだひゑね ええ（音引け）し  
 やごしや（此は伊能基布曾。此の五字は音を以るよ）  
 ああ（音引け）しやごしや（此は嘲笑ふぞ）

「宇陀の高城に 鳴毘張る 我が待つや」の「我」とは、通説では戦の勝者神武の軍だと解釈されているが、初めに宇陀の地に「押機」の罾を仕掛けたのは兄宇迦斯であり、地の文に「待ち取らむ」とあるので、「我が待つや」の「我」は兄宇迦斯でもあると考えられる。佐藤和喜は、「い伐らむと 心は思へど い取らむと 心は思へど」も「宇陀の高城に 鳴毘張る 我が待つや」も、殺された大山守や兄宇迦斯の心が歌われていると説く。勝者が敗者の死体を眼差すうちに眼差される死者の側になり、死者の眼差す景を通して死者の心が歌われるという、歌における死者と生者の声が重なり転位が起きる仕組みについて論じる。

しかしさらに考えたいのは、なぜ敗死者の心を勝者が歌うことが出来るのか、という点である。戦闘で命のやり取りをする殺す者と殺される者、あるいは狩猟での狩人と獲物とが、歌という神話的思考が発動する言語においてどのように交感可能になるのだろうか。猪股ときわは『万葉集』巻十六の「乞食者詠」の鹿の歌について、「殺す・殺される、食べる・食べられるという対極にある関係が交錯し、交換し、境界線が溶解する」という状態は、『乞食者詠』の歌表現が、全体にわたって現出させようとしている事態である」と説き、矛盾することどうしを繋いでいく神話的な論理を歌の随所に見出し出していく<sup>33</sup>。

こうした問題について、次章で「・・・立てる あづさゆみまゆみ」を中心に考えてみる。

### 三 「あづさゆみまゆみ」が「たつ」

「まゆみ」は樹木の名でありつつ、「ま」という完全なものを称える語がついた弓への美称でもある。通説ではこの「まゆみ」は樹木を指すと解釈される。一方、直前の地の文「河の邊に伏し隠りし兵、彼廂此廂、一時共に興りて、矢刺して流しき」を受けて、宇治川べりに並んだウチノワキイラツコの兵の弓を指すと解する説もある<sup>34</sup>。

しかし、歌の「まゆみ」が樹木なのか弓なのかということよりもむしろ、「あづさゆみまゆみ」という「ゆみ」の音の畳み重ねのなかで、弓でもあり、弓の前身である樹木でもあり、樹木が「たつ」ように弓が「たつ」と歌われていることが重要なのではないか。

『古事記』で弓に関して「立」の語が使われるのは、ここ以外では以下の二例である。軽太子が同母妹である思い妻の軽大郎女に向けてうたう歌に、

隠り國の 泊瀬の山の 大峽には 幡張り立て さ小峽に

は 幡張り立て 大峽にしなかさだめる 思ひ妻あはれ

櫛弓の 臥やる臥やりも 梓弓 たてりたりも 後も取

り見る 思ひ妻あはれ

「とりみる」ものとして弓と思い妻は同じで、妻が臥せたり立ったりするように、弓も臥せたり立ったりするものとして歌われる。

また、高天原に上るスサノヲの震動に立ち向かうべくアマテラスが武装して雄たけびをする場面の、武装の過程を書き連ねるなかに「弓腹振立」がある。

即解御髮、纏御美豆羅而、乃於左右御美豆羅、亦

於御縵、亦於左右御手、各纏持八尺勾之五百津之美

須麻流之珠而、(自)美至流四字以音。下效此。(曾)毘

良迹者、負二千入之鞞。(訓)入云能理。下效此。自

曾至迹以音。(比)良迹者、附五百入之鞞、亦所取佩

伊都(此)二字以音。(之)竹鞞而、弓腹振立而、堅庭者、

於向股踏那豆美(三字)以音。(如)沫雪蹶散而、伊都(二

字)以音。(之)男建(訓)建云多祁夫)。

従来、「弓腹振立」は「弓腹を振り立て」と、「立」は他動詞として解釈されてきた。たしかに『古事記』には動詞+目的語という正格漢文の語順ではなく目的語の名詞が動詞の前にくる例も散見するが、この箇所に関していえば「弓腹振立」以外はず

べて動詞＋目的語の語順になっているので、動詞の前にくる「弓腹」は目的語ではなく主語で、「振立」は自動詞で「弓腹は振り立ち」ではないか。アマテラスが手順を踏んで武装していくうちに、弓がひとりでに勢いよく立ち、ついに弓の取り手が男たけびを発するに至る。男装し武装していくことによって威力が高まり、それにつれて武器の威力も高まる。武器と取り手の威力が極点に近づくと、取り手が弓を立てることと弓が立つこととはもはや分別しえないということを、「弓腹振立」という言語は体現しているといえよう。

このように『古事記』では、弓は立てる（他動詞）ものではなく立つ（自動詞）ものだということがわかる。ウヂノワキイラツコの歌においても、樹木同様に弓もひとりでに靈威を帯びて立つのであり、それは「あづさゆみまゆみ」と「ゆみ」を畳み重ねることにより、地の文の「矢刺」で表されるような弓の行使からさらに弓の本質が露わになる状態へと移行する。

立つものとしての樹木と弓。樹木は弓の前身であるが、弓が殺すための武器であるのに対して樹木は伐られるものでもある。殺すものと殺されるものが「あづさゆみまゆみ」において一つになる。また、大山守の心がうたわれた後、最後にまた「あづさゆみまゆみ」と歌いおさめられる。歌いおさめで「あづさゆみまゆみ」というのは、敗死者の心を歌うものの名乗りではないだろうか。うけひで扮装によって宇治川の渡りの執職者と化したように、今度は「あづさゆみまゆみ」と歌うことによつて宇治川の渡りの「あづさゆみまゆみ」に化す。殺すものでもあり殺されるものでもある「あづさゆみまゆみ」だからこそ、

敗死者の言葉を伝え歌うことができる。<sup>55)</sup>

以上により、地の文においてウヂノワキイラツコと大山守との間で両者によって生じた意味分節ゼロの「訶和羅」は、歌の「あづさゆみまゆみ」の中で殺すものと殺されるものが一つになることとして反復され、また「あづさゆみまゆみ」を歌いつつ「あづさゆみまゆみ」が歌うという、主客未分の事態としても反復される。

そしてこの反復においてウヂノワキイラツコは、日継の皇子のまま「ちはやぶる」荒振る草木言語の世界へ回帰していったのではないだろうか。父・応神天皇が角鹿の蟹の本性をあらわして宇治の木幡の嬢子と「うたた」の状態うたたで御合して生まれた皇子は、日継の皇子にはふさわしく、しかし天皇にはならなかった。

注(1) 猪股ときわ『古代宮廷の知と遊戯』(森話社・二〇一〇年)

第二部第三章「ワザとしての書くこと」『古事記』序文の「歌」から

(2) 佐藤和喜「景と心」(勉誠出版・二〇一一年) 第二部第一章第一節「記歌謡の激情性―景と心の転位の関係から―」第二節「記歌謡と紀歌謡―死者の鎮魂をめぐる―」

(3) 猪股ときわ「異類に成る―「乞食者詠」の鹿の歌から―」(日本文学)二〇〇九年六月

(4) 佐藤、注(2)に同じ。

(5) 居駒永幸『古代の歌と叙事文芸史』(笠間書院・二〇〇三年) 第三部第二章「叙事歌としての記・紀歌謡」第一節「大山守の歌と叙事表現」は、「ちはやひと 宇治の渡に 渡り

瀬に 立てる あづさゆみまゆみ」について、古橋信孝の  
いう巡行叙事だとし、神に見出された最高に素晴らしい樹  
木「まゆみ」の下で最高に素晴らしい男女の神婚が行われ  
るといふ様式にのっとって「君」「妹」が歌われると説く。  
居駒は、ウヂノワキイラツコが檀の樹を見て亡き大山守(君)  
とその妻(妹)を重ねて思い起こし愛惜していると解釈する。  
しかし、「君」と「妹」とは一对の男女が互いに相手を呼び  
合う呼称であることにもつと注目するべきだろう。死んだ  
大山守を「君」と呼び、死者の妻を「妹」と呼ぶことがで  
きる、歌うウヂノワキイラツコのことばは、どのような位  
相のものなのか。この問題に関してはさらに考えてみたい。